

ハイデガーとデリダ、対決の前に

—— re-trait 概念の存在論的・政治的画定 ——

西山 達也

フランスのハイデガー読解においては、ハイデガーの存在論を要約的に表現する語として *retrait* [退去／退隠／引き退き] という語が用いられることがある。この語はラテン語の *retrahere* [引き戻す、遠ざける、引きなおす、再生させる] に由来する語で、日常用語としては、撤退、退却、引き戻し、閉じこもり、あるいは引きこもりの場所を意味する。ハイデガーの語彙でこの語は厳密に対応するのは *Entzug* (脱去) であるとされているが、フランス語の *retrait* の用法はより広く、例えばジャン・ポーフレやフランソワ・フェディエは、後期ハイデガーの用語である *Entzug* と、*Verbergung* ないし *Verborgenheit* に関わる語彙をともに *retrait* によって翻訳しており、また、現在流通している『存在と時間』の翻訳でも *Unverborgenheit* が *non-retrait* などと訳されている。このようにフランス語の *retrait* は、ハイデガーのコーパスのうちには正確な対応物を見出しえないがゆえに、アレーティアと *Ereignis* をつなぐハイデガーの思考全体を牽引する支配的な語となりえている。

こうした *retrait* の語彙に注目しつつ、ハイデガーの思考との対決を試みたのは、他でもないジャック・デリダである。ハイデガーの「存在論的差異」をエクリチュールと「差延」の思想に読み換えるという『グラマトロジー』(1967) 以来のプログラムに従いつつ、デリダは「ウーシアとグラマー」(1968)、『絵画における真理』(1978) などにおいて具体的なハイデガー読解に取り組む。78年の「隠喩の *retrait*」は、これらの作業の見取り図を示すとともに70年代のデリダの思考を凝縮させたテキストである。この論考は、一般には、リクールとのあいだのいわゆる「隠喩論争」の一部をなすテキストとして知られているが、そこでの議論の照準は、言語論的なもの(「隠喩の引き退き」と存在論的なもの(「存在の引き退き」)を相互規定する *retrait* の運動そのものへと向けられている。とりわけ、「隠喩の *retrait*」の後半部で、デリダは(1) *retrait* の運動を、引き (*trait*) の反復 (*re-*)、あるいは引きの運動そのものにおける二重化の作用へと還元し、(2) こうして還元された *re-trait* の語彙素をさらに *ziehen* (牽引) と *reißen* (断裂) という二つのドイツ語へと逆翻訳することで、(3) *re-trait* の運動を分割するとともに、この二つの運動を相互に交錯させている。この一連の操作によって、デリダは、ハイデガーにまさしくエクリチュールの思考を語らせながら、同時に、デリダ自身もエクリチュールの存在論を語ることになり(例えばデリダは「*trait* がある」「*trait* は何ものでもない」といった言表を繰り返している)、こうして *re-trait* の運動は、ハイデガーとデリダの両者の思考のあいだの断絶を刻まれた相互浸透の運動を律動づけることになる。

ところで、このように *re-trait* の思考を形式化するとき、デリダとハイデガーが断絶を伴いつつ共有したこの思考の運動がいかなるコンテクストへと接合されうるかを改めて問う必要性が生じないだろうか。とりわけ、このような問いかけが必要となるのは、*re-trait* の

思考の妥当性を政治的なものとの関係性において捉え返すときであろう。デリダの盟友であるナンシーとラクー＝ラバルトは、デリダの協力のもとで主宰した「政治的なものについての哲学研究センター」(1980-84)において、その主要な論題を「政治的なものの re-trait」に設定した。政治的なものの引き退き／引きなおしを問う際に、ナンシーとラクー＝ラバルトの念頭にあるのは、ハイデガーと「政治」との関わりである。例えばラクー＝ラバルトは、ハイデガーの政治加担、そして34年以降のハイデガーの政治からの撤退のうちに、深化された政治的なものへの「引き退き」の運動を看取する。すべてを政治へと動員する政治体制によって逆説的に政治的なものの固有な領域が解消されようとするまさにそのとき、ハイデガーは政治的なものの本質(原-政治)へと「引き退いた」、というのである。ここで、とりわけ「政治的なもの」と re-trait の思考との関わりを取扱わなければならないのは、まさしくハイデガーの政治からの撤退(それはハイデガーによって「形而上学」からの撤退として説明される)の時期と、彼が Entzug を主題化する時期が重なり合うからである。最終的に、こうしたコンテクストとハイデガーにおける思弁の徹底性、そしてハイデガーからの「ラディカルな」断絶において引き継がれたデリダの re-trait の思考とをいかにして関係づけるか(あるいは関係を断絶させるか)が、「幕引き」と「引きなおし」の思考、あるいは「変革」の思考をめぐる本発表の課題となる。

(以上の論点のうち、当日の発表では、主としてデリダのテキスト「隠喩の re-trait」と、そのなかで言及されているハイデガーの講演「言語の本質」(1957/58)の読解を通じて re-trait の思考の射程を明らかにしたい。「政治的なものの re-trait」に関しては問題提起にとどめ、発表後の討論の場で議論を行いたい。)